

薬史レター



第51号

日本薬史学会

JSHP

2009年1月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

日本薬史学会 2009年カレンダー

- 4月18日(土) 総会 13時～ 東京大学薬学部講堂
総会講演会 15時～
「キナ導入の足跡を辿る」 星薬科大学准教授 南雲 清二先生
「薬と倫理学」 東京大学名誉教授 加藤 尚武先生
懇親会 17時30分～ 東京大学山上会館

学士会分館が東京大学による「赤門周辺地区の再開発計画」の具体化により3月末で閉館となります。東京大学薬学部講堂に近い会議室が見付からないので、従来、総会に先立って開催していた理事、評議員合同の会議は行いません。今回は総会資料を理事、評議員に事前に送付して意見を求めるという案が昨年11月15日の年會に併せて行われた臨時理事・評議員会で決定されました。

- 11月7日(土) 年会 金沢市 金沢大学薬学部(角間キャンパス)
年会長 徳久和夫評議員(石川県薬剤師会 会長)
詳細は次号に掲載

- 11月14日(土) 北海道支部発足5周年記念会 札幌市 北海道教育会館

事務局よりのお願い

- (1) 平成20年度の会費未納の方は至急納入下さるようお願い致します。平成21年度の会費は会計年度(4月1日～翌年3月31日)が改まってから御請求申し上げます。
- (2) 薬史レターへの投稿をお待ちしています。薬史学会通信No.41に掲載されている「薬史レター投稿のヒント」を参照下さい。

第 39 回国際薬史学会の案内

第 39 回国際薬史学会はウィーン大学教授 Christa Kletta 博士を会長として、2009 年 9 月 16 日～19 日の 4 日間に、「医薬と社会」を全体テーマとして、オーストリア共和国の首都ウィーンで開催される。日本薬史学会事務局に送られて来た学会案内(学会指定の公用語である独、英、仏語で書かれている)を薬史レターに同封するので参加希望者は熟読されてから登録(REGISTRATION)してください。

発表希望者は ABSTRACTS の E-mail による締切りが 3 月 31 日です。

日本薬史学会 2008(平成 20)年会報告と感想記

松本 和男

日本薬史学会・2008 年会は平成 20 年 11 月 15 日(土)に大阪の南地区にある近畿大学(11 月ホール小ホール)で行われた。小ホールとはいえ、200 名が収容できる素晴らしい会場であった。参加人数は約 100 名であった。終始、熱心な聴講と活発な質疑応答の討論は印象的であった。以下、プログラムに沿って、それらの概要と感想を述べる。

開会の挨拶

共催代表として、近畿大学副学長の掛樋一晃先生から次のような主旨のご挨拶があった。

——既に薬学 6 年制が始まっているが、その制度の問題が浮上した時点から、薬学の歴史を紐解き、先達の尽力と共に薬史(学)の重要性を再認識した。また、くすり産業と薬学教育の歴史において、道修町を主とする大阪の存在が大きい。現在、薬学教育のみならず製薬産業も大きな転換期に直面しているが、このような時期こそ歴史を見直し、参考にすることが必要である。この時期に、本学で伝統ある日本薬史学会の年会を開催されることは大変光栄である。タイトなスケジュールであるが、有意義な一日にしていなければありがたい。——

続いて、本年会の播磨章一年会長から次のようなご挨拶があった。

——本年会は一般講演、シンポジウムおよび特別講演の 3 本立になっている。一般講演では、17 題もの演題をいただき、感謝している。演題数の関係で、一般講演時間を 1 題 20 分から 15 分に短くすることになった。ご理解とご協力を賜りたい。

講演要旨集にも記したように、本年度(2008 年)は、“大阪らしさ”を標榜し、特に、「くすりの町・道修町」を主題としたシンポジウムを企画した。シンポジストとして次の 4 名の先生方にご講演をいただく。①谷崎潤一郎の研究者としてご高名であり、また道修町の歴史に造詣が深く、道修町に関して多くの著書を出しておられる三島佑一先生。②道修町の成功企業・老舗メーカーの塩野香料(株)顧問の吉原正明先生。③道修町の中央に鎮座されているくすりの神様“神農さん”をお祀りする少彦名神社の宮司の別所俊顕先生。④塩野義製薬(株)ご在職当時から道修町古文書保存事業に参画され、その後、くすりの道修町資料館館長として道修町古文書保存に尽力された久保武雄先生。また、シンポジウムに先立ち、道修町の近代化のさきがけとなった舎密局、司薬場が大阪に開設されるに至った風土と経緯などについては、その道の大家の大阪大学名誉教授の芝哲夫先生に特別講演を賜ることになっている。これらを通じて、日本の薬業のルーツともいえる道修町についても、よりご理解を深めていただければ幸いである。

一般講演・概要

今回は一般講演の募集も多く、17 題になった。内訳は、くすり関連の古書に関するもの(2 件)、薬史

学教育に関するもの(2件)、薬史上の人物に関するもの(4件)、宗教・医薬史学に関するもの(2件)、くすりに関する史的考察(3件)および薬事行政に関するもの(4件)である。

座長：宮本 義夫(くすりの道修町資料館)

1. 歴史のなかのアポセカリ(-)イングランド初の女性開業医エリザベス・ガレット・アンダースン
柳澤 波香(津田塾大学)
イギリスでは19世紀でも女性のアポセカリは敬遠されていたが、優秀なエリザベス・ガレット・アンダースンが現われ、1865年に初の女性開業医が誕生した。その後、彼女の名前を付した病院も誕生した。その経緯についての報告。
2. 上方落語の中の医薬品—江戸落語との比較
五位野 政彦(東京海道病院 薬剤科)
上方落語は400年近くの歴史をもつ伝承話芸である。その古典落語27作品の中に21件の医薬品などが登場するが、江戸落語に比べて少ない。登場する医薬品名などの報告。
3. 松山大学薬学部医療薬学科における薬史学教育事始
牧 純(松山大学薬学部感染症学研究室)
薬学部設立の歴史は浅いが、「国際薬学史」(山川浩司著)などを使って薬史教育に力をいれている。その結果、学生の薬学に対する関心度が高まり、成果があがっている報告。
4. 韓国近代薬学教育史—日韓併合時代を中心に
石田 純郎(中国労働衛生協会)
朝鮮の近代薬学教育史、医学教育史に関する論文は極めて少ない。4週間ソウルに滞在し、韓国近代薬学教育史などを調べた。その概要の報告。

座長：若宮 建昭(近畿大学理工学部)

5. 星一と阿片事件
三澤 美和(星薬科大学 薬理学教室)
明治の終盤から大正にわたって、製薬王星一がモルヒネなどのアルカロイドの工業生産に大きな貢献をしたが、阿片事件では、犠牲者になった。これは、わが国家の大きな損失につながったとの報告。
6. 日向薬(くすり)事始め(その6)—日向出身のシーボルトとボンペ門下生およびその周辺—
山本 郁男(九州保健福祉大学薬学部)
幕末期、日向地域から長崎に赴き、シーボルトとボンペの下で学んだ碓井元亮らの活躍の歴史と地元の文教発展に寄与した報告。
7. 名著「江戸と北京」、翻訳までの師・朝比奈泰彦と弟子・三宅馨
小川 通孝(有限会社たちばな調剤薬局)
イギリスの園芸学者ロバート・フォーチュンの名著「Yedo and Peking」の翻訳書がわが国の近代化に役立った。翻訳に当たって朝比奈先生を助け、尽力した三宅博士の人物像の報告。

座長：宮崎 啓一(三栄化工(株))

8. 日本漢方古方派の先駆者、後藤艮山の医学に見られる日本的病因論
須藤 美緒(東京理科大学大学院 薬学研究科)
「一気留滞説」で有名になった日本漢方古方派の先駆者・後藤艮山の医学思想の背景や自家方「黒丸子」の処方などにおける活躍ぶりを明らかにした報告。
9. ヒンドゥー教のダンヴァンタリ像と薬師如来像の類似性
奥田 潤(名城大学 薬学部)
ダンヴァンタリ像(外科医)は左右2本ずつの手をもち、左手には不老長寿の薬酒用の薬壺と薬草をもつ。薬師如来像との類似性から、薬師如来像の原像はダンヴァンタリ像と推測した報告。
10. 室町～江戸期の眼科書に見られる仏教医学の影響
上妻 加奈(東京理科大学大学院 薬学研究科)

日本で最初の眼科専門医・馬島流の秘伝書「灌頂小鏡」は外用薬、鉱物性生薬の使用が多いことから、仏教医学の影響を大きく受けていたと考えられたが、日本において、独自の発展があったと推測する報告。

座長：辰野 美紀(行岡保健衛生学園)

11. 茶花の史的考察

徳岡 清司(株式会社ハリマ漢方製薬)

中国から始まった茶の歴史は古く、多くの著書もあるが、茶花に関する文献などは僅少である。茶外の茶としての薬効などについての報告。

12. 「血の道」の薬の系統と王子五香散の位置づけ

荻原 通弘(日本薬史学会)

江戸時代、多くの「血の道」の薬が売られていた。薬方書の版本・写本・活字化された資料本から関係する薬方を抜き出し、類似薬方ごとに分類し、王子五香散の位置づけの報告。

13. 薬石「無名異」：石見銀山の副産物として献上された薬について

成田 研一(島根県済生会高砂病院 薬局)

島根県江津市桜江の中村家所蔵(中村家文書)などから、「無名異」の効能などを調べた結果の報告。

14. 薬局方としての「和剤局方」の意義

鈴木彦彦(北里研究所東洋医学総合研究所 医史学研究部)

「和剤局方」は国定の薬局方であり、売薬の規格の面から、薬局方としての位置づけや意義について報告。

座長：前田 光子(神戸学院大学薬学部)

15. 日本におけるドラッグストアの歴史に関する一考察(Ⅲ)

－医薬品販売の変遷について－

佐藤 知樹(日本医療薬専門学校)

医薬品の販売体制は、この10年大きく変ってきた。ドラッグストアの役割も大きくなり、保険医療に参加し、処方箋調剤の機能をもつ業態に至った変遷の面からの報告。

16. 日本の医薬品副作用被害と安全対策の歴史

高橋 春男(エーザイ株式会社 臨床研究センター)

医薬品の本格的な安全対策の歴史は1960年のサリドマイドによる副作用から始まった。患者中心の安全対策への歴史的過程と今後の対策の報告。

17. 明治時代の薬業行政：大日本製薬の事例をめぐって

ヨング・ジュリア(法政大学 経済学部)

大日本製薬(株)の道修町における日本の近代製薬産業の始まりと位置づけ、その後、新しいビジネス環境につながっていく過程の報告。

特別講演・概要

座長：山川 浩司(日本薬史学会会長)

「舎密局、司薬場にいたる大阪の風土」

芝 哲夫先生(大阪大学名誉教授)

明治初年にくすりの町・道修町と関連の深い舎密局と司薬場が大阪に開設された。これらの施設が大阪に生まれた風土と経緯をお話しされた。具体的には、木村兼葭堂、山片蟠桃、中井履軒、麻田剛立、間重富、高橋至時、伏屋素狄、中天游らの活躍ぶりが紹介された。これらの人物は、特に高貴な身分でもない点に特徴がある。大阪の地の自由闊達な思想に支えられ、旺盛な好奇心とそれぞれの能力を発揮して独特な文化人のグループが誕生した点も特筆すべきことである。これらの積み重ねが、大阪人の獨創性につながってきたかも。加えて、緒方洪庵はこのような活力ある知的風土の中で「適塾」を開き、蘭(医)学の導入と共に多くの逸材を育てた。さらに、オランダ人化学者・ハラタマにより舎密局の開設に至り、その後、その建物が司薬場(衛生試験所の前身)に転用・開設された。これらが、道修町の近代化のさきがけとなった。

(なお、芝先生の特別講演は、後日、「薬事日報」の特集号に掲載される予定)

シンポジウム・概要

「くすりの道修町にいたる大阪の薬業風土」

座長：松本 和男(元田辺製薬(株)役員)

1. 「道修町の歴史と商法」

三島 佑一先生(四天王寺大学名誉教授)

江戸後期に国産和薬が増え、和薬改会所が開設されたところから、和漢薬の中買卸商が栄えた。明治に入って、洋薬の商いが増え、洋薬の製造へも挑戦するよう変遷してきた。また、昭和3(1928)年生まれの講演者の小学校時代の道修町は埃もうもうのごった返した公害の町で、“きたない町”であった。商いの中心でもあった道修町は、「生き馬の目を抜く」といわれ競争の激しい環境である一方、義理人情にも厚かった。これらが相俟って「活気のある道修町」になり、世界的な製薬企業の発祥の地になったと考えられる。現在は、常に過去と未来の接点にあるので、過去の経験・実績が未来を展望するための判断の基礎となる。現在は厳しい状況であるが、過去の歴史を見直すことも大事な時期であるのでは。

2. 「道修町と共に歩んだ200年」

吉原 正明先生(塩野香料株式会社 顧問)

創業時代(1808年)は、薬種商であり、和漢薬を扱っていた。明治時代に入り洋薬需要が高まり、1874年に三代塩野吉兵衛から、弟・義三郎が分家し、1878年(明治11年)に薬種問屋(塩野義製薬のはじまり)を開業し、和漢薬から洋薬へ転換した。その後、1908年(明治41年)に本家も和漢薬から芳香原料の輸入販売へと転換し、塩野吉兵衛商店と改め、薬剤、芳香製品、香料を扱うようになった。今年が創業200周年に当たる。1996年に、これまでの合成事業を分社化し、同じく道修町に医薬品原薬製造の「塩野フィネス株式会社」を設立した。常に、「扇」印のもと、誠実に真、善、美を求めて信頼に応える企業理念をもち歩んできた。

3. 「道修町と神農信仰」

別所 俊顕先生(少彦名神社宮司)

神農信仰は古くからあったが、道修町では薬種中買仲間の業務に間違いが起らないように立願するための神農であった。それが、明治時代に「薬祖講」という信仰団体として設立され、少彦名神社の基礎となり、道修町の業界で神社を造ることになった。これは道修町の団結力のもとになり、道修町文化発展の要となった。

4. 「道修町資料保存事業について」

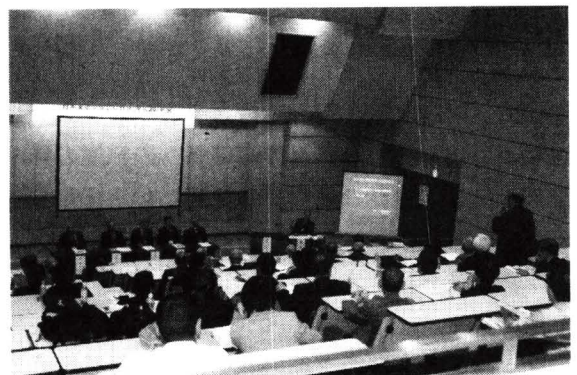
久保 武雄先生(くすりの道修町資料館前館長)

歴史を参考にするには、正確な歴史資料が必要である。道修町には数多くの古文書が残っている。これらを活用するために、平成2年から「道修町古文書保存会」(準備委員会)を立ち上げた。平成9年に正式発足した。同年、上記活動の拠点として、「くすりの道修町資料館」をオープンし、だれでも活用できる状態になった。スタートから10年間の年月がかかった。活用していただきたい。

5. 総合質疑討論

「大阪年会らしさをだすために、芝先生の舎密局・司薬場についての特別講演に引き続き、薬学・医薬品(産業)の歴史では欠かせない存在であるくすりの町・道修町について、4名のシンポジストからお話をいただいた。質疑応答では、芝哲夫先生にも加わっていただき、総合質問の形式で行いたい」との前置きから、質疑討論が1時間近く行われた。

——大阪は、江戸時代から“天下の台所”といわれるように経済活動は活発であり、中でも、く



シンポジウムの総合討論

すりに関して、“道修町”が商いの中心地であった。

その後も“くすりの町、道修町”として大きく発展し、今日ではいくつかの世界的な製薬企業も誕生した。——との座長の前触れから、具体的に下記のような質問があった。

- ・何故、道修町にくすり産業が発達したか？
- ・九州からの船は浪速の何処に着いたか？
- ・長崎に荷が入ったらすぐに相場が道修町でわかったのは？

これらの質問に対して、次のような答弁があった。主な点をまとめて列記する。

- ・大阪(町人社会)の自由闊達な雰囲気——懐徳堂(大阪町人の教育機関)がルーツ
- ・大阪人の好奇心、特に自然科学に対して——適塾を中心とした洋学(蘭学)の育成
- ・漢方薬・和薬の商いとオランダを主とする西洋医薬の相乗作用
- ・適塾、舎密局と司薬場の関係
- ・緒方洪庵——中国渡来の本草学を日本独自のものへ変える努力・蘭方と漢方生薬の製剤化の研究——医療文化の芽生え
- ・神農さん(少彦名神社)の求心力を中心とした道修町の団結力——信用・信頼
- ・幕府からの信頼も高い
- ・大阪商人は損得勘定に厳しいが、私財を投じてでも学校を建てる心意気
- ・長崎—大阪を主とした海上交通の便——東横堀川、高麗橋あたりに唐薬問屋が並ぶ
- ・享保年間、唐薬種・和薬種が道修町で目方をチェックし、品質を鑑別し、価格を決定——流通経路の確立

これらの質疑に加えて、道修町の古文書研究により文学博士の学位を取得された羽生和子先生(76歳 薬剤師)から、——道修町の古文書などをもっと研究・活用して、多くの学位取得者が出ることを望む——との発言があった。この前向きな発言をもって、討論の締めとした。

来年度年会開催(金沢市)のアナウンス

次期年会・会長の(社)石川県薬剤師会・徳久和夫会長から、「日本薬史学会 2009 年度年会は、来年 11 月 7 日(土)、金沢大学・自然科学本館(角間)で開催予定。金沢では手作り年会を考え、多くの参加者を歓迎したいので、奮って参加をしていただきたい」旨のご挨拶があった。

閉会挨拶

日本薬史学会 2008 年会の村岡修・事務局長から次のような趣旨の閉会のご挨拶があった。

——タイトなスケジュールの年会であったが、最後まで熱心な聴講と活発な質疑応答討論をいただいた。さらに、“くすりの町・道修町”を知っていただく有意義な年会であった。参加者各位のご協力にお礼申し上げたい。懇親会にも是非、参加いただきたい。——

懇親会

シンポジウム終了後、近畿大学内のカフェテリアで懇親会が行われた。参加者は約 70 名であった。冒頭、山川会長から本年会関係者への感謝の辞が述べられるとともに、発表された講演者には、後日、是非、薬史学雑誌にも投稿してほしいとの要望を込めたご挨拶があった。奥田潤理事(名城大名誉教授)の乾杯の音頭の後、和気藹々とした雰囲気の中で、懇親交流が始まった。特別講演者の芝先生、4名のシンポジスト先生方にも参加していただいた。また高校生会員の参加もあり、極めて盛況な懇親会であった。

後記：薬史学会関西支部の薬史学会会員は極めて少数であるが、播磨年会長以下、世話役の努力で年会準備を企画した通りに無事終了できたことはなによりであった。特に、会場を提供いただいた近畿大学・

薬学部総合研究所の関係者には、終始、大変お世話になった。事務関係者および学生さんからも大いなる支援をいただいた。特に、事務局長の村岡教授のご尽力には、深謝したい。

日仏修好通商条約締結 150 周年と日仏薬学の交流

竹中 祐典

日仏修好通商条約 22 カ条と貿易章程 7 則が江戸で調印されたのは安政 5(1858)年 9 月 3 日(陽暦 10 月 9 日)で今年 2008 年は調印 150 周年、両国で多彩な行事が行われている。

鎖国日本が出島のオランダ人を介してのみ限られた西洋事情を吸収していた時代に、フランスという国柄をまともに知り得なかったとしても不思議はない。フランス人ノエル・ショメル(Noel Chomel)は植物学と薬学に興味をもち西洋本草書の刊行を思い立ち『家政辞典』2 巻として 1709 年に世に出した。その言によると、「財産をふやし健康を維持するための手段を記した家政(économie)の辞典」とされており、「すでに実験ずみの多数の薬品を記述し、・・・外国産の植物とその特性についての知識などをアルファベット順に配列したもの」である。その内容はそれまでの西洋本草書をこえるものであった。フランスでも増補は続けられ、オランダに渡るとその蘭訳本が出版され、さらに独自に補充されたものが出回った。翻訳はロンドンでも行われ、英訳本は年を隔てて 2 回出版されている。出島を通して幕府の手に入ったものは、1778 年のオランダ語増訂版 7 冊と 1786 年の第 8 巻で、日本の蘭学者、本草家にオランダの書として注目されることになった。長崎の通辞、馬場貞由と大槻玄沢がその和訳を手がけたのは文化 8(1811)年で、天保年間に『厚生新編』として 70 余冊ができ、その後和訳は一旦打ち切られるが、それが活字本になったのは昭和 12(1937)年、5 巻本に索引 1 巻をつけて出版(恒和出版)されたのは昭和 53(1978)年で、167 年の年月をかけた大事業ではあったが、このことは余り知られていない。宇田川榕菴は途中からこの『厚生新編』の翻訳に加わり、自著『植物啓原』3 巻の作成に役立たせた。榕菴はまた、ラヴォアジエ(Antoine-Laurent Lavoisier)の名著『化学原論』(1789 年)に基づき『舎密開宗』を著し、そこにまとめた知識から熱海をはじめ 30 にもおよぶ温泉の水質分析を試みている。わが国衛生化学の草分けといえよう。

さて、時代は一気に現代に飛ぶが、日仏の薬学交流が実質的に始まったのは 1950 年代の初めからである。パリ大学薬学部教授連によるサイゴン大学での集中講義の慣例は、自然にその教授たちを戦後日本に立ち寄らせる機会を与え、多くのフランス人薬学者を日本に迎えることになった。中でも、昭和 32(1957)年 4 月のアンドレ・クヴォヴィエ(André Quevauviller)教授(衛生学、薬品作用学)の来日はその交流に弾みをつけることになった。同教授は、独自の創薬研究を進める一方で、日本人の研究業績にも注目し、刈米達夫、石館守三、熊谷洋、江橋節郎等々の医薬学者との会合を積極的に持たれた。さらに、若い日本人薬学研究者のフランスへの留学には多大の便宜をはかられた。その結果、多くの留学生在がフランスで勉強する機会を得た。それら、あるいは別のルートからのフランス留学生の若干名の発案で日仏會館傘下の日仏薬学会が創立されたのは昭和 47(1972)年 10 月 10 日で、刈米達夫氏を会長とし、機関誌『日仏薬学』(現在は“Correspondance”に変更)を発行して日仏薬学の交流をはかった。この創立には、当時日仏會館学長であられたベルナール・フランク(Bernard Frank)氏(のちにコレージュ・ド・フランス教授兼日本研究部長)の大きな力添えがあった。来日フランス薬学者らの推挙により刈米達夫氏(1955 年 11 月)と石館守三氏(1972 年 11 月)にパリ大学名誉博士の称号が与えられた。日仏薬学会が発足してからは、独自にフランスからの招待講演者を選び、国内数カ所での講演、討論会を行っている。これまでに来日されたおもな招待講演者はつぎのとおりである：

- Pr.A.Quevauviller (パリ第五大学、衛生学、薬品作用学) 2回
 Pr.G.Le Moan (パリ第五大学、毒性学)
 Pr.G.Dillemann (パリ第五大学、薬事行政、薬史学)
 Pr.R.Bourdon (パリ フェルナンウィダール病院)
 Pr.G.Siest (ナンシー大学、臨床生物学)
 Pr.A.Revol (リヨン大学、臨床生物学)
 Pr.H.Nargeolet (パリ第五大学、薬事行政)
 Pr.P.Bourrinet (パリ南大学、衛生学)
 Dr.C.Bismuth (パリ フェルナンウィダール病院)
 Dr.J.Parrot (フランス薬剤師会会長) 2回
 Dr.A.Beresniak (パリ第五大学、医療経済応用学際研究所研究主任)

フランスの薬学の府はフランス薬学アカデミー(Académie Nationale de Pharmacie)で200年を越える歴史をもつ。そこにはフランス以外の37カ国からの外国人通信会員約100人がいて、日本からは、辰野高司(1973年)、中嶋宏(1988年)、竹中祐典(1996年)、奥田潤(2002年)の4人が選ばれている。

日仏交流150周年にあたり本年9月に「日仏学術交流のルネッサンス」と題する日仏會館関連22学会による総合シンポジウムが開催された。日仏薬学会は、自然科学における実験の意義を強調しながらも、「実験研究のために倒れる犠牲者の生ずることを覚悟しなければならない」と予言したフランシス・ベーコン(1561~1626)の言葉を、ルネッサンスがもたらす一面を達観した重要なキーワードとみなし、本会理事の山田光男氏にそのお父上の尊い殉職の経歴を「マリー・キュリー夫人と放射線研究に殉じた最初の日本人」として発表(9月26日)して頂いた。

その他の動きに触れると、名城大学(奥田潤教授)ではナンシー大学との学生の交流があり、永井恒司博士(永井記念薬学国際交流財団理事長)は日仏 DDS シンポジウムを主催されている。日仏の大学間の個々の交流としては、日仏医薬精密化学会議が20回ほどに及ぶ討論会を続けている。

フランスのノーベル化学賞第1号受賞者、薬剤師アンリ・モワサン(Henri Moissan)によるフッ素の単離を記念して制定されたモワサン国際賞があり、優れたフッ素化学研究者に贈られているが、日本からは小林義郎氏(東京薬科大学名誉教授)が受賞されている。

この節目を機会に日仏の薬学交流がさらに進展することを期待したい。

残念。加賀の秘薬 混元丹・烏犀円が消えてゆく—— 家伝薬を守ろう

服部 昭

430年という長い年月、連綿と続いてきた中屋(金沢市)の混元丹が、市場から、家庭から消えてゆくのではないかと危惧されている。烏犀円も同じような運命にあるという。混元丹、烏犀円といえば正倉院時代の薬物が主成分として用いられているほどで、一企業の薬剤という問題ではなく、歴史的に貴重な文化財なのである。中屋の製剤では混元丹のほかに、腎心丹、安神丸、赤龍丹などの伝統薬はすでに発売が中止されている。

今や、家伝薬は存亡の危機に立たされている。薬事制度の改革は容赦なく家伝薬に襲いかかり、従来どおりの製造販売が続けたい状態になっているという。かつて、GMPが医薬品製造業に導入されたときに、業態を維持できないというので多くの家伝薬が消えていった。

家伝薬の製薬事業そのものが、ハードあるいはソフト面で、今日の製薬業の基準に適合しないという

のであれば、行政が国民の利益、安全のために存在を問題視するのは当然といえよう。しかし、昨今、
気遣われているのは、このような製造環境の問題ではない。

今回、存続の問題になっているのは家伝薬に特に関係の深い販路、通信販売の規制が一因である。家
伝薬は長い歴史で育まれたブランド力があって、特定の製造販売業者が、全国の代理店を通じて、ある
いは直接、通信の手段で全国の馴染みの客に頒布されている。

今回の改正薬事法は一般薬の販売制度を大きく変えて、リスクを分類し、第3分類以外は通信販売が
認められないという方向にて法の改正が進んでいる。これによれば、家伝薬は第3分類ではなく、第2
分類に入るので、通販はできないことになり、家伝薬は貴重な販路・販売手段を失う。薬の安全な使用
のためというのは分かるが、家伝薬がそれに巻き添えを食らうのは理解できない。

無形、有形の文化遺産を、地域で、あるいは国が、そして世界の人々が守るということは現代を生き
るものの義務になっている。そういう中であって、営々と歴史を築き、国民の健康に寄与してきた伝統
の医薬品が、今、この時期に消えてゆくのを薬学の歴史を学ぶものとして看過できない。

現在の技術では再現の困難な日本独自の処方、原料による家伝薬の伝統と技術を守らなければなら
ない。医薬の過去を学ぶとともに、現在、温存されている家伝薬という文化遺産を大事に後世に伝えるの
は薬学史研究者の努めであると思う。

学会の場においては、家伝薬の存在できる環境を整え、保護することを訴え、理解いただける人を広
めてゆきたい。すなわち、原料、設備、製造環境を確保し、家伝薬が医薬品としての品位を保ち、販路
を備えて、将来の見通しのできる制度を整えてゆくことである。

また、家伝薬の定義づけ、リストの作成などの作業も合わせて進めなければならない。

謝辞:本文の作成に当たり、堺市 片桐棲龍堂 片桐平智先生のご指導を受けましたことを感謝します。

立川市薬剤師会「第14回健康のためのくすり学フェア」参加記

五位野 政彦

「くすり」のことを市民に知ってもらおう。正しく使用してもらい、薬学を身近にかんじてもらおう。

その担い手は薬剤師である。

厚生労働省ほか主催の「薬と健康の週間」が今年も10月17日から23日まで行われた。各地域の薬
剤師会ではいろいろなイベントを開催している。市民へ薬学に関する広報活動を行い、医薬品に関する
正しい知識を啓蒙し、適切な医薬品の使用をしてもらうことが可能になる。

さる10月19日(日)、東京都立川市でも立川市薬剤師会が主催する「健康のためのくすり学フェア」
がJR立川駅北口のフロム中武立川で開かれた。生薬試飲コーナー、薬物乱用防止コーナー、くすりの
相談コーナーなどがあり、立川市薬剤師会会員薬剤師による指導、相談などが行われている。

今回のイベントの目玉は「昔のくすり展示」である。日本薬史学会会員でもある平井有立川市薬剤師
会長のコレクションが展示され、先生みずから来場者への解説を行っている。

平井先生のこのコレクションは2006年には、薬事日報紙上(2006年12月15日)やテレビ東京系番
組「開運なんでも鑑定団」(2006年11月7日:先生ご自身の出演)で紹介され、また最近も2008年10
月16日付日本経済新聞文化面で先生自らコレクションとその背景を説明されている。

江戸時代からはじまるこのコレクションの数々は若い来場者には新鮮な驚きをもって受け入れられて
おり、また年配の方々には懐かしさを感じるものを含んでいるであろう。このイベントは岐阜県の内藤
記念くすり博物館の移動展示のようでもあり、またもうすこし身近な、あるいは「レトロ」な雰囲気

かもし出している。この薬史学関連の展示が多くの人を呼んでおり、結果、市民の正しい医薬品知識の獲得につながっている。

これらの展示品の薬史的考察、あるいは社会(薬学)的な背景が薬史学雑誌に投稿されることを願う。そうすればこのコレクションも産業遺産のひとつとしての価値がでてくるであろう(「日本薬剤師連合会 会員之証」などはそのひとつであろう)。

薬学生にもこのコレクションを見てもらいたい。近世からの日本の庶民と医薬品とのかかわりを知ることは、19世紀から発展した有機化学や衛生化学を学ぶことと同じように重要であろう。



馬と戦国武田氏

杉山 茂

著者は薬史学雑誌の最近号に、日本人の肉食の習慣が案外古い時代から続いていることを書いた。そこには千を超える勅旨牧や私牧が奈良時代から平安時代を通じて存在し、西国には牛の牧が、東国には馬の牧が多かった事実を述べた。

1. 馬の歴史の概観

馬が日本古来のものでなかった事は「魏志倭人伝」に記述されている。今の定説では古墳時代前後(3世紀~6世紀後半)、江上先生の北方騎馬民族渡來說も含め朝鮮半島経由で日本にもたらされたものとして良いだろう。事実この時代の古墳からは馬具等の副葬品が出土していることから明白である。日本の王朝は、馬飼部と言う職業的部民を置いて馬の飼育に当たらせた。古代新羅には馬飼奴と言う賤民がいた事がわかっている。甲斐の武田氏の祖は清和源氏の流れで、新羅三郎義光とする。馬飼部の長の後裔ともとれる。A.D.720年成立の「日本書紀」に「新羅の黒駒」の挿話がある。雄略天皇13年9月の条にこのような話が載っている。新羅から来た大工の名人がそばで踊っていた美女に気を取られて銘木を傷つけた。天皇は怒り死刑を命じた。しかし天皇はその後反省し、恩赦の使者を「甲斐の黒駒」と言う名馬に乗せて刑場に向かわせた。

「ぬば玉の甲斐の黒駒鞍着せば

命死なまし甲斐の黒駒」と言う和歌が詠まれていて

使者は間一髪で助命に間に合ったのである。

後世聖徳太子、一名厩戸皇子の愛馬も甲斐の黒駒であったと言う説がある。ちなみに幕末甲州に清水の次郎長と張り合った黒駒の勝造という賭博師がいた。甲斐の黒駒はそのくらい有名だった。

話が逸れたが平安時代から、甲斐、信濃殊に佐久地方、上野、下野、武蔵地方には馬の牧が多かった。そのころ地方から京に馬を献上することを「駒牽・こまひき」と言い毎年8月に行われた。中でも信濃佐久の望月の牧からの献上は8月の23日に行われ、名馬が見られるとして京の都人の関心を集めた。その中の一人紀貫之の古歌が「拾遺和歌集」に載っている。

「逢坂の関の清水にかけみえて

今や牽くらむ望月の駒」

その後鎌倉時代は奥州糠部の牧が有名で、宇治川の合戦で名を馳せた池月や磨墨はそこから出たと言われる。

2. 戦国時代の武田氏

ところで戦国時代甲斐に武田信玄と言う武将が現れて、彼のユニークな発想は優秀な軍馬を集めて騎馬隊を組織し、敵陣をいっきに攪乱すると言うものだった。そのため彼は諏訪の大祝を攻め、当主を謀殺しその一族が支配する信濃・佐久地方を奪った。なお上野、下野、武蔵を攻取し騎馬を確保した。その風林火山の旗の下、疾風迅雷の戦闘ぶりは周囲の戦国大名を脅かした。

信玄は天台宗延暦寺から僧正の称号を与えられた出家の身だが、正室、側室を置き栄養を攝るため常時肉食をしていた様である。当時は真言密教も性欲、食欲に対して非常に寛大な時代であったとしてよい。

今、甲府で有名な郷土食「ほうとう」は昔は佐久地方の牧で始められたもので今では味噌仕立ての「うどん煮込み」の様なものだが昔は麺類でなく、きび・黍、あわ・粟、蕎麦等を捏ねて団子にし具の多い「すいとん」の如き物だった。しかもその具には馬肉がふんだんに使われた。馬肉は暗褐色で、グリコーゲンとタンパク質が豊富で、脂肪は少ない。野戦で戦闘する場合等まさに適当な食物である。武士は馬は食べないと言われているが老いた馬、事故で足を折った馬、足の遅い馬等は殺された。冬の寒い信濃では、食肉は山椒の葉でくるんで山の麓に寒冷保存された。ある意味で戦闘食でもあった。

今でも信州は、熊本と並んで馬の刺身が出されるお国柄である。

◆新刊紹介

くすりの夜明け／～近代の薬品と看護～

2008年7月23日より2009年3月29日まで開催されている内藤記念くすり博物館の企画展「くすりの夜明け—近代の薬品と看護—」の図録で、同館の所蔵資料のうち関連するものを図版として掲載したもので、参考文献リストを含めて95頁。

本会理事の石坂哲夫博士の監修と前館長篠田愛信氏の協力を得て同館の稲垣裕美学芸員が編集した。以下に目次を抜粋する。

医薬のあゆみ

薬品と医療技術

1. 天然物から成分を抽出・分離してできた薬品
2. 病原菌の発見と予防接種
3. 麻酔と消毒
4. 合成された薬品
5. 抗生物質

医療・衛生・看護

1. 身近な医療
2. 公衆衛生
3. 看護と手当て
4. 暮らしの中で

「絵で見る医薬のあゆみ」その他各章の絵画は Robert A. Thom(ロバート・A・トム)の作品で、米国の University of Michigan Museum of Art および University of Michigan Health System のご好意により掲載されたものである。(末廣 雅也)

◆北海道支部だより

平成 20 年度「合同学術集会」の開催（報告）

吉沢 逸雄(北海道支部事務局)

表題の「合同学術集会」は、北海道における医・薬の歴史愛好家の 2 団体、北海道医史学研究会と当会北海道支部のジョイント研究会の名称で、平成 19 年度に結成されました。3 回目を迎えた今回は、平成 20 年 11 月 8 日(土)、北海道医師会館で開催されましたので概要を報告致します。

集会は、医史学研究会会長の長瀬清先生(北海道医師会会長)と当会北海道支部長の斎藤元護先生(当会理事)のご挨拶でスタート。

特別講演は、JR 北海道のトップ小池明夫氏による楽しいお話でした。JR 北海道は、我が国で 3 番目に古い鉄道で有名な幌内鉄道(明治 13 年、小樽－札幌間竣工。明治 15 年、小樽－幌内間全通)を前身としています。その後旧国鉄を経て今に至っていますが、厳しい諸条件下でアイデアを続出し奮闘中、その姿勢は畑違いの我々にも大いに勉強になります。

一般講演は、両集団からそれぞれ 4 件報告され、いずれも興味ある内容で盛況でした。今回、新顔の発表が増え、研究領域が広がったことは喜ばしい傾向と云えましょう。参考までにプログラムを示します。最後に、当支部顧問の東洋彰宏先生(北海道薬剤師会会長)のご挨拶で閉会に。参加者は 40 名(当会からは 27 名)で、そのまま全員が懇親会へも参加、賑やかなフリートークキングでした。

特別講演 座長 島田 保久(北海道医史学研究会代表幹事 元町整形外科)

「道内における鉄道発展の歴史と現状および今後の課題」

小池 明夫(北海道旅客鉄道株式会社 代表取締役会長)

一般講演 I 座長 片岡 是充(宮の森記念病院)

1. 「眼目秘録(慶長 18 年)」 竹田 眞(竹田眼科)

2. 「関場不二彦の二つの胸像」 菊田 道彦(北海道医史学研究会)ほか

3. 「関場不二彦著『西医学東漸史話』について」

秦 温信(札幌社会保険総合病院)ほか

4. 「蝦夷地の医療(Ⅱ)」 島田 保久(元町整形外科)

一般講演 II 座長 猪爪 信夫(北海道薬科大学)

1. 「北海道薬科大学創設胎動期の新事実(続々)― 北海道理科大学(薬学部)予定校地の道薬科大へ
の名義変更を示す謄本 ―」 吉沢 逸雄(日本薬史学会)

2. 「北海道医薬品卸業の昭和後期から平成にかけての変遷」

根布谷 ふみえ(はるにれ薬局)ほか

3. 「新聞にみる北海道の売薬広告 I. 明治 28 年新年号」

本間 克明(株式会社 北海道医薬総合研究所)

4. 「小樽 秋野 ロシア領アレクサンドロフスク支店顛末」

秋野 治郎(株式会社 ファーマホールディング)